



発行・古平町史編集委員会
編集・古平町史編纂室
第四十六号（一日発行）
平成五年七月一日

北海の古平風土物語（十二）

卒業生を送る学芸会の思い出

高橋 源 五口

春、三月三日桃の節句、おひな祭りの日であった。学校の裁縫室にきれいなひな壇を飾っていて、高等科二年の兄妹たちを送る小学芸会が開かれた。

私たち三年は組の出しものは劇『韓信』であった。日ごろ元気のいい登秀一君が悪童の大將役で、私はその大將の股くぐりをする、少年時代の韓信の役、ほかの男子は、私を大声でばかりして笑う悪童役であった。

いよいよ本番、大声でがなりたてる悪大將の登君の悪態を受けながら、股の下をやっとくぐり抜けたところで悪童連中に笑われた。送られる高等二年の兄妹たちも笑った。劇ではあったがみんなに笑われて、恥ずかしくて面白からざるところであった。

その時、送られる側だった水見八郎さんが、

「韓信は偉いんだ、偉いんだ、偉いんだ、こっつさ来い」と、温情あふれるような声をかけてくれた。

「お前は、弥伝コ（送られる兄の故・小野寺弥伝次）のおんず（弟）だもんア。喜太コもいる」と、その中へ連れて行かれてはやしたてられ、並べられていたみかんや干しいも、甘酒を貰った。

これが堪忍の賜物かな！
このあと彼岸過ぎ、岡部先生から修了証書のついた通知箋をいただいて、四年生に進むことができた。

ガンゼひげの岡部先生は、ニコニコしながら、
「来年もよく勉強するんだよ」

と言って、ひとりひとりに渡された。

いまなお心底に残る懐かしい思い出である。

× × ×

登秀一君は、高等二年を卒業したのち札幌に出て、金融会社で就職したが、のち志願兵として旭川第七師団歩兵第二十六連

（三）

「蝦夷地の犬のこと」②

いつもまといつく犬がいた。海岸へ行って海に石を投げるとそこへ泳いで行きまた別

なところへ投げるとそこへ泳いで行く。船に乗って海に出ると、後を追ってついてくる。いつまでもついてきて苦しうにするので、船に上げるとうれしそうに尾を振るが身ぶるいはしない。身ぶるいをする船中の者が

困る、と言いつつ聞かせておいたことを守ったのである。やがて岸に着いたと

ころ、今度はさかんに身ぶるいをしていた。人の言うことを実によく聞き分ける犬だと、いっしょにいた人たちが感心したという。

アイヌの《ことわざ 世間ばなし集》から

アイヌ人と満洲人がほぼ半分ずつ住んでいる。松前藩の藩士もいて、運上屋もある。

カラフト島は宗谷から海上十八里（七十き）離れた島であり、周囲は約三百里ある。この島には

カラフト島では、川を上る船を犬に引かせる。船に四、五人が乗り、荷物を積んで、へさきに綱をつける。その綱の先を犬の首から前足にたすきに掛ける。先頭はメス犬であり、メス犬から枝のようにな綱を出し、五、六匹に綱をかけてそれで引かせるのである。人が船を引くより早く、馬を扱うようにかけ声をかけ、引かせたり止めたり自由である。また雪が降るとそれを引かせる。

隊に入隊した。昭和十三年、ノモンハン事件の戦闘に参加して第一線の小隊長として戦い、戦死されたことは誠に哀悼にたえません。心からご冥福をお祈りする次第です。



今回は、人の魂が、この世に永久帰国することもある、というお話に移ります。

いま、A家とB家のあの世のボスが相談して、Xというこの世に帰る人を決めたといいます。すると、その人の魂はヒューと妊婦の腹に入り、やがて月満ちて生まれると「この子は、五年前に死んだおじいちゃんそっくりだ」とか、「おじいちゃんと同じ名前をつけよう」などというのが、「生まれ代わり」という長い間の素朴な日本人の信仰であった。

故郷を想う 福井幸平

親鸞上人の教えも、極楽浄土から帰ってくるのは子孫になつて帰るのではなく、念仏信仰で極楽往生した人が、念仏の行者になつて帰ってくる。だから親鸞自身も、自分は誰かの生まれ代わりではなかるうか、と思われたようだ。

この「生まれ代わりの信仰」については、魂の循環という考えがあるそうです。すると、私も誰かの生まれ代

わりということになり、これが代々つながつていくものとしたら、悪行や自分だけという生き方は考えていかねばならない。

この世で生きていく人間関係は大変だけれども、自然もまたそうであり、自然のこの循環の体系を壊してはならない。山の木を切れば砂漠化し、川も海も死んでいく。最近、自然を大切にす

矢ガモのニュースでは毎日からはらして見ていた。

最後に——古平では年々お墓が立派になつて結構なことだがあの墓地のごみは何とも気になる。先祖を敬い、お盆中毎日お墓参りをする習慣は誇れるものだが、供物をそのままにして帰るのは改める必要がある。いつも気になることの一つである。一人一人の心がけで解決できると思うが？ 新しい町長さんも

海の魔神伝説

5

婦女禁制の神威岬

各場所の請負人はこれらの人たちの救済に困つたが、もし一人でも餓死したり問題が起きたりすると、不行届という悪評やおとがめを受け、それで請負をやめさせられるようなことにて

含め、町民のお知恵を借りたいものだ。せつかくの墓地公園の構想もこれでは台なしである。今回は、自然と生命の循環論を梅原猛先生の本から抜粋したまでである。

× × × × ×

水見 句丈

野仏の半眼微笑春の雨
梅酒飲み八十路半ばを病無く

夜霧よりぼつぼつ烏賊灯現れし
齊藤 波留

福井 幸平

魚臭もすはまなす匂う風のあり
大島 喜恵

子等を乗せ夜間スキーのバス発車
仲谷 美砂

ブラジルは真夏と言ひぬ初電話
× × ×

もなれば、それは自分の家にとつて一大事である。しかし、一方よく考えると、今これらの人々を救済して土着させれば、漁業はますます発達し、*「二八」の収入も増加して、これは自分の利益になる——と、各場所の請負人はできる限りの力を尽くして、米・みそなどを貸し与えて便宜を図り、土着させることに努めたのである

東北地方などから移つて来た人たちの多くは、神威岬から南の岩内・古宇・磯谷・歌棄に住みついたため、このあたりの人口が急に増えた。特に岩内は、百戸たらずであつたものが、十数年の間に五、六百戸にも増えた。松前地方は、鯨不漁のせいで人は集まらなかつたし、また北の方が松前藩の禁制の目をのがれやすかつたのである。
*「二八取り」のことで、何も持たない漁民は、請負人から食糧から漁具など一切の仕込みを受け、その代り漁獲した物はすべて請負人に（←次ページ）



古平青年会結成

古平 義雄

3

会費をとらない会では、ただ

一つの資金源が『演芸発表会』であつた。さきに同志会がみちをつけていたので、これは併用して『映画会』より確実な収入源であつたし、年一回の恒例行事として町の人たちからも歓迎された。会員の結束にも思わぬ効果があり、それぞれの部門に責任をもたせると、百人以上の会員がフルに動いて効果をあげることができた。こうなるとシメたもので、会長の私は、舞台の上で『父帰る』の兄貴役にだけ徹していればよかった。

新地・浜町だけで終わるのもつたいなくて、ついに稲倉石まで遠征した。三回の演芸発表会を終え、稲倉石から下りる山道は、さわやかな青葉の匂いが満ち、トラックの荷台から仰ぐ夜空は満天の星であつた。誰かともなく歌い出し、次々と別の歌が合唱された。西部の拠点までの長い道のり、「これが青春だ」とばかりに、歓声と歌声

が続いた。

戦後の交通事情は、今からは想像も出来ないような不自由さで、余市から汽車に乗るためには古平の役場から切符購入の証明書を書き、それを持って行かない限り余市駅では絶対に切符は手に入らなかった。それも役場で発行できる枚数は一日たった五、六枚だけであつた。こう

なると、前の日から泊まり込みで役場の入口にがんばらなければ旅行はできなかった。

古平町以外はとうなっているのやら、若い人たちに今現在の外の空気を吸わせたかつたし、私自身も見つかった。思い切つて幹部会を召集して相談したところ、意外とあつさり承認された。あり余る資金があるわけではなし、遠くに行けるはずもなかったが、小樽・洞爺湖・札幌のコースをとり、泊りは洞爺湖のパンガローを借り、食事は女性会員の手料理と決まつた。大型バスといつても、今から見れば小さなものだったから、参加人員は会員の一部に限られた。噂を聞きつけて「私の娘も連れて行ってもらえまいか」という申し出もあるほど、ある意味ではこのころの壮挙であつた。

つづく



佐原松五郎 墓碑

明治三十年 八月 建立

古平の墓地には、半ば草に隠れるようにして、ひっそりと建っている墓石がいくつもある。当時は名のおつた人もあろうし、また、その縁者でもなければ由来がわからないというものもある。この墓碑の主「佐原松五郎」とはいったいどうゆう人なのだろうか。明治時代、新地方面を

(前ページより) 売り渡しその中から漁場の権利金として二分を払い、自分は八分を受け取る制度である。しかし、実際は貸しつけた物の代金は高く見積もり、漁獲物を買うときは品質を厳しく吟味して安く買いたたき、そのため請負人の利益は五分をこえたといひ、請負人はばく大な利益を得たのである。

ば小さなものだったから、参加人員は会員の一部に限られた。噂を聞きつけて「私の娘も連れて行ってもらえまいか」という申し出もあるほど、ある意味ではこのころの壮挙であつた。

入会贈り物

- ▼古平小学校卒業記念茶碗三個 渡辺 嘉之さん
- ▼漁具類、櫓ほか 二十数点 大河原 猛さん
- ▼蒸籠(せいろ)、杵 高橋 健一さん
- ▼「処女会」関係書類 北橋 幸男さん
- ▼戦前の教科書ほか 十一点 仲谷ヒロ子さん

小学校卒業して出稼ぎ

大沢 松蔵（談）

鯨の盛漁時代であつた大正年代は、ヤン衆^{ヤン}といわれる、主に東北地方からの出稼ぎが多く入つて来たが、鯨の不漁と共に古平から樺太（サガレン）・カムチャツカなどへの出稼ぎが増えていった。

私は昭和七年、小学校を卒業するとすぐカムチャッカへ出稼ぎに行つた。今でいえば、中学三年生と同じ年である。三月に卒業して、六月にはもうカムチャッカへ行つてたが、それから毎年のように行つた。

氣候は寒いし、仕事はつらかった。それでも行くのは、なんといつても給料が良かったからだ。古平にいてももう鯨はとれなくなってきたし、それに
出稼ぎに行くとなると会社で前金を出してくれるので、それで一家の正月ができた。前金を貸してくれるというのが大きな魅力であった。

出稼ぎの取りまとめをする人

出稼ぎの取りまとめをする人

がいて、その人に連れられてみんなそろって函館まで行く。

函館を出港するのは、六月七日か八日ごろである。それまでに自分で使う日用品や食べ物類を買うのだが、港にはいろんな

【今日はこんな日】

古平町弘報が創刊される

重点は中学校建設と船入瀬

[昭和26年]

昭和二十六年六月、『古平町弘報』が創刊されました。現在の古平町広報『ふるびら』のはじまりです。四十二年後の平成五年七月には、二二三号を数えることになりました。

創刊にあたり」と題して、伊藤町長はあいさつの中で次のように述べています。

「出来るだけ正確に町政の歩み方、進み方を町民に知ってもらふということは容易なわざでは

店がいっぱい出ていて、そこでは何でも売っていて、現金が無くて会社社の切符で買った。

いよいよ出港となると、カムチャツカの奥の方へ行く人たちの乗った船から先に出る。それから二、三日遅れて全部の船が出港するが、見送りの人の数も大変なもので、岸壁が人で埋まる。

漁夫は、自分自分の荷物を持つて船に乗りこむが、休む場所なんかはどこにもなく、それぞ

ないが、しかし、町政のあり方を十分に知っていただくところに、町政に対する町民の関心が高まり、正しい世論の胎動が生じ、強い協力があるものと信じて、この度『古平町弘報』を発行することにいたしました。」

その第一号を飾って、トップにある大きな見出しは、

重点は中学校、船入瀬、今年度の予算の重点として、

①中学校の建設

れ積み荷の上やその間にもぐつて寝るしかない。だから少しでもいい場所をとるのに競争だ。なかには自分の荷物をなくしてしまふ者もいる。

船は三、四か月分の燃料用石炭、食料など一切の必要物資を満載して行くが、漁場に着くまで約一週間かかる。雨が降ると荷物のシートの下にもぐりこむが、荷物より待遇が悪かった。

② 船入瀬の整備拡張および道路の補修

③ 都市計画事業の実施

そして、古平中学校建設協力会の誕生をあげ、役員として、

委員長	齊藤 林蔵
副委員長	今 良六
同 橋本 善二	

が選ばれ、次のことについて実行することが決まった。

- ・ 古平中学校建築費助成三百万円寄付完了
- ・ 敷地の勤労奉仕についてそのほかの項目として、
- ・ 古平町議会常任委員の選任
- ・ 画期的農業委員会発足
- ・ NHKのど自慢大会
- ・ 露店のインチキに注意
- ・ 青年学級の開設

などの見出しが見られます。

船は三、四か月分の燃料用石炭、食料など一切の必要物資を満載して行くが、漁場に着くまで約一週間かかる。雨が降ると荷物のシートの下にもぐりこむが、荷物より待遇が悪かった。

② 船入瀬の整備拡張および道

③都市計画事業の実施

そして、古平中学校建設協力会の誕生をあげ、役員として、

委員長 齊藤 林蔵

副委員長 今良六

同 橋本 善二

が選ばれ、次のことについて実行することが決まった。

・古平中学校建築費助成三百万円寄付完了

- ・ 敷地の勤労奉仕について
そのほかの項目として、

・古平町議会常任委員の選任

・画期的農業委員会発足

・NHKのど自慢大会

・露店のインチキに注意

・青年学級の開設

などの見出しが見られます。